

古志青年部年間作品集 第一号

目次

〈俳句作品〉

■自選十二句

未来

イーブン美奈子

6

ふらふら

石塚直子

8

吾子

泉 経武

10

蛇の殻

泉 裕隆

12

鯛焼

市川きつね

14

涼風

大塚哲也

16

笛

岡崎陽市

18

橙

川又裕一

20

五体

関根千方

22

猫の腹	高角美津子	24
静謐	高平玲子	26
喫茶去	竹下米花	28
春を待つ	竹中 彩	30
朝顔	丹野麻衣子	32
大夕焼	辻奈央子	34
鰯雲	藤原智子	36
初鳥	前田茉莉子	38
長風呂	森 篤史	40
菟	山内あかり	42
らしく／ぶらず	山本純人	44
飛天	渡辺竜樹	46
■青年部入会案内		48

〈文章〉

■ 講評

古志青年部年間自選作品を読む

大谷弘至

50

■ エッセイ

俳句という石垣

関根千方

62

タイの季語

イーブン美奈子

66

魔力

前田茉莉子

69

■ 青年部合宿句会報告

市川きつね

73

■ 青年部年間活動記録

77

俳句作品

未来

イーブン美奈子

初旅の目に映るものすべて花
初空やスニーカーにて国境へ
卒業の花いつぱいの未来かな
春寒し南の国にゐてもなほ
嘔吐するごとく泣きたり桜咲く

離陸して真夏の夜のきらきらと

夏空を引き寄せてゆくロープウェー

早回ししてゐるごとく蟻の道

残像を置いてゆきたる蜥蜴かな

星涼しセブンイレブンまで歩く

ちちろ鳴く人ごととして恋のこと

地中より沁み出すやうな寒さかな

■一九七六年生まれ。神奈川県出身。タイ国バンコク都在住。海外日系人協会の第四回みなとみらい文芸祭にて海外日系人協会理事賞、第八回同文芸祭にて文芸祭賞受賞。

ぶらぶら

石塚直子

万緑の色移りたる日記帳

蓮の葉を押し上げてゐる幼魚かな

途切れたる会話の間にも星涼し

ワイシャツの皺深くあり夏の果て

夏痩せの膝を抱へて眠りをり

筑波嶺の稜線辿り小鳥来る

寄り掛かりたき日もありて秋団扇

紅葉かつ散る影の濃き能舞台

ひとつだけぶらぶら揺るる烏瓜

行く秋やハンドル握る手の強し

ため息を飲み込んでまた南瓜切る

初冬に運命線を確認かめる

■一九八七年生まれ。茨城県出身、在住。筑波大学院在籍。古志校正部部員。

吾子

泉
経武

浴衣には納まりきらぬやんちやかな

長き夜の吾子の寝息にすぐるなし

鱗雲テニスボールが壁を越え

冬の虫むしのちからをぬきとられ

冬の蝶地蔵の肩で息をつく

枕許ひろく片付け聖夜来る
大都会芥もくたや福寿草
若鮎や巖に宿る山の神
銭亀や鯉に泳ぎの指南受け
蝉の殻重みの抜きたいのちかな
あの頃の蚯蚓鳴く地と深き空
くひだふれ砂町銀座秋の道

■一九六五年生まれ。東京都出身、在住。

蛇の殻

泉
裕隆

蛇の殻枝から枝へ橋となり
亀一つ川の向かうで鳴きにけり
引鴨に遅れ飛行機国を出る
大腹を見せて鮫鰯ぶら下がる
落としたりなくとも落としたり角

飛行機は鯖雲の群れ追ひ抜けり
葉の裏で日をよけるたる秋の蝶
起こされて起きてまた寝て朝寝かな
その奥に神の声する茂りかな
下り坂平気で走りくる鶉
鮭上る川真黒になりにけり
米の香をふき出す釜や秋の風

■二〇〇一年生まれ。東京都出身、在住。

鯛焼

市川きつね

海風やみかんの国の田植歌

猫の子をつまめばのびる運びけり

触れてみて桜と気づく新樹かな

親よりも大きな子ども扇風機

食べながら次の通草を探しをり

べべつけてお地藏さまや露の石
冷ややかに山をのみこむ山の影
ことごとく望のひかりを浴びしもの
厨まで転がしてゆく西瓜かな
鯛焼を割つて小豆をかがやかす
セーターを着たるたれもが優しさう
冬の朝とことこ犬のついてくる

■一九八七年生まれ。新潟県出身。
東京都在住。古志編集長兼青年部
部長。第二回石田波郷新人賞受賞。

涼風

大塚哲也

富士山の裾のびのびと露の臺
さへづりや下ノ畑ニ居リマスと
推敲の足がしびれて春灯
たかななを焼け露のまま土のまま
六十頭牛のちらばる青嵐

涼風や幸なることの次々と

合宿にふさはしきこの暑さかな

また行きますあの枝豆をいただきに

榎亭やつやつやかぼちや煮つけられ

大川を諸国の落ち葉流れゆく

寒鰯へ深く大きく包丁す

はづみたる命のそのままぶり大根

■一九八一年生まれ。東京都出身、在住。

笛

岡崎陽市

たんぽぽの絮をとばして旅はるか
まさをなる空にたくさん風
ひとり吹く鶯笛にころあり
のど袋はじけんばかり鳴く蛙
木漏れ日のなかや泉へ続く道

青葉してふるさとの山十重二十重
はばたきて大きなことよ揚羽蝶
草原に日のあるかぎり飛蝗とぶ
七夕や河のむかうに灯がともり
たましひにしみわたりけり菊の酒
ゆく秋の坂なだらかに湯の町へ
つららよりひかりの玉の一雫

■一九七二年生まれ。愛媛県出身、在住。二〇一〇年古志新人賞受賞。

橙

川又裕一

春耕の畝うつくしく富士筑波

陶然と唐銅あをむ春の雨

東京は蜂巢のごとく春ともし

その奥に虹立つ茅の輪くぐりけり

帯締めて金剛力や暑に抗す

いとしきや裸子くすぐる盥水

鶏頭に日のきほひたつ真昼かな

たかだかと空ひとひねり柿日和

竹を伐る音のぼりゆくしづけさよ

つとおはす気吹戸主か隙間風

橙も一所懸命餅の上

しろじろと犬は尿して寒の入り

■一九七一年生まれ。茨城県出身。
東京都在住。

五体

関根千方

落し文虫が巻きたる歌ならん
あるときは若き僧らが草角力
鮫鱧はどん底を知る面構へ
闇鍋や鬼が囲んでゐる如く
凍えたる万年筆を懐に

這ひ這ひに皆ついでゆく恵方かな
菜飯喰ふ余すものなど何もなく
残りゐる鴨ひきつれて家鴨かな
きかん坊負ひて筍煮てゐたる
子子の棒にはじまる五体かな
白玉に映るものみな艶やかに
夕立は大河またいでゆく如く

■一九七〇年生まれ。東京都出身、在住。古志東京支部長兼ホムページ部部长。二〇一〇年古志新人賞受賞。

猫の腹

高角美津子

青梅や窓開けはなち朝稽古
開会を待つ男らの白扇子
父の日や初めて象を見た昔
百歳の祖母の好みはさくらんぼ
賛美歌の小さき楽譜夏椿

短夜やジャズに聞き入る老父婦
朝涼やのびのびひろぐ猫の腹
しわしわの寝間着の家族今朝の秋
秋風やごま豆腐買ふ帰り道
秋の夜の小さき匙ですくふ菓子
はじめての茶粥がうれし秋の朝
どぶろくの文字太々と店に吊る

■一九七三年生まれ。兵庫県出身。
大阪府在住。

静謐

野良犬の乳房揺れをり山桜

静かなる象の足音すみれ草

かりがねや夜も休まぬ波の音

焙られてかつと口開く岩魚かな

桃色の岩魚の喉に針寒し

高平玲子

母象の乳あふるるや望の月

鹿笛や山にかぶさる山の影

山眠る小さきトネル懐に

蟪蛄の枯れ尽くしたる軽さかな

秋灯や鎧のごとく鯛の骨

太平洋の溢れこぼるる海鼠かな

風鈴をも一度鳴らし仕舞ひけり

■一九六九年生まれ。東京都出身。
静岡県在住。

喫茶去

竹下米花

春の海沖より流れ来る光
卒業の子に珈琲を淹れてやり
筍の滋味まだ知らぬをとこのこ
たつぷりと珈琲淹れて梅雨籠
ソーダ水並びていざ商談の卓

吹き抜ける涼風のごと俳句これ

梧桐や座敷で珈琲いただきぬ

つくつくぼふし三度鳴いて湯沸きにけり

読みかけの本積みあげて九月かな

ミルク珈琲三杯目夜業の灯

十二月一日珈琲豆尽きぬ

海老よりも搔揚がよき晦日蕎麦

■一九七四年生まれ。神奈川県出身。京都府在住。

春を待つ

竹中彩

屋根を行く浮かれ恋猫勇ましく
縁側の日だまりにゐて春を待つ
春風とともに届きし便りかな
熱帯夜ふとん蹴飛ばし枕投げ
パソコンで鰻屋探す土用太郎

台風が週末めがけやつて来る
日の暮れた花野に残る笑ひ声
このシヤツも短き出番九月尽
終はりなきメールを交はす夜長かな
五円だけポケットに入れて初詣
一目抜け三玉ほどき毛糸編む
牡丹鍋ほほぼる我は猪のやう

■一九七六年生まれ。山口県出身。
福岡県在住。二〇一〇年福岡市文
化芸術振興財団賞（俳句部門）受
賞。

朝顔

丹野麻衣子

押し花の朝顔に濃く花の色
一枚の紅葉となりて舟下り
柿紅葉はらりと落ちて唐津碗
凧や火入れを待てる千の皿
鮫鱈の口を逃れてきたるもの

とぶやうに売るる蕪をつくる人

西行の花を心に草の餅

花あまた落として椿軽からん

玉苗も余りの苗も泥の中

簾屋に簾の屑の散りはじめ

鮎生簀瀧の流れに打たせあり

空蝉のいくつやすらふ柏の葉

■一九七四年生まれ。石川県出身。神奈川県に育つ。東京都在住。古志自選同人。古志同人会副会長。二〇〇八年第三回飴山實俳句賞受賞。

大夕焼

辻奈央子

南禅寺五右衛門も見し余花ならん

更衣一年ぶりの風まといひ

更衣あとは心をたたむのみ

大夕焼耐へてみちのくうつくしく

みちのくへ続く夕焼見てをりぬ

木洩日の涼しさの下信号待つ

七夕や叶はぬならばそれでよし

昼寝してますます生きん卒寿かな

駄々こねる睡蓮もゐてまた楽し

梅雨晴や折れし桜の幹匂ふ

宵山や亀もそはそはしてをりぬ

萩の経抜け出し後は違ふ吾

■一九七七年生まれ。神奈川県出身、在住。古志ホームページ部員兼青年部副部長。

翺雲

藤原智子

背伸びして朝顔の種採らんとす
赤とんぼ庇を蹴って空の中
芋の子の声ころころと笑ひ合ひ
どこまでも土を押したる薩摩芋
まだ青き蔓も一緒に引きにけり

団栗の舗道にひとつ跳ね返り
蟻螂や皆に交じりて遊びたる
拾はれて桜紅葉となりけり
保母さんの作りし団子翳雲
頂いてあつといふ間に熟柿かな
山門のそばに紅葉の始まりぬ
秋深し夫が絵本を読み聞かす

■一九七六年生まれ。大阪府出身。埼玉県在住。古志校正部部長。
二〇一〇年第四回三千句競詠賞受賞。

初鴉

前田茉莉子

「落ち込むな」友よりメール去年今年

初鴉 祝 吉 町の 主 の 声

ふらここの鎖ピンクに塗られをる

ホームラン野球少女の春の空

ロココ調皿に四つの桜餅

校舎よりエーデルワイス夏に入る

師の扇ぐ扇子の風を貰ひけり

カレーライスの香り運ばむ扇風機

前髪を切りそろへたる文化の日

三つ編みのぴよこぴよこ跳ねる秋日和

牡丹鍋白内障を忘れさす

内密の藩主の話大火鉢

■一九八四年生まれ。宮崎県出身。熊本県在住。一九九七年宮日新聞学園俳壇賞、一九九八年小林一茶俳句大会学生の部佳作受賞。

長風呂

森
篤史

聖 二 月 リ ボ ン 結 び が 下 手 な 君
菜 の 花 や 分 厚 き 少 女 漫 画 読 む
一 杯 の 酒 を 分 け 合 ふ 花 見 可 な
泥 団 子 桜 の 花 び ら で 飾 る
フ ラ メ ン コ 踊 る 夜 更 け や 星 涼 し

冷房が眼帯の紐揺らしをり

背伸びした色のペディキュア浴衣かな

朝顔を小雨破つてしまひさう

流星が跨いでいった島一つ

悩む日の長風呂柚子を道連れに

山眠るやうにずしりと猫眠る

ペン胼胝の消えぬ指先大晦日

■一九九〇年生まれ。埼玉県出身、在住。武蔵大学在籍。

莢

蚕豆やどの子も莢にねむらせん
やはらかきところで抱く裸の子
鱧食うて白く冷たき花おもふ
まだ青き粒も混じれり今年米
空も石も幹も仏も時雨たり

山内あかり

冬の日やきらきらこぼれ粉葉
星の中の星のひとつや寒卵
ふるさとに雪降り続く雑煮かな
ほのほからちぎれてほのほ草を焼く
仰ぐたび花ふえてゆく深空かな
花びらの流れてきたりしじみ貝
しののめの大和しじみを汁とせん

■一九六八年生まれ。新潟県出身。
京都府在住。古志校正部部員。

らしく／ふらず

山本純人

お隣と文句言ひ合ふ猫じゃらし

本の虫耳そばだてる胡桃割り

干し柿を甘やかしたいしぼりたい

双子にも平等に来て秋惜しむ

鯛焼きの複数形にSつける

雑炊やいいかげんにも恋をして

釣り合ひのとれぬ彼女と食す牡蠣

ジョーク言ひ今日は何色海豚色

白旗をあげて知りたる北風向き

ちんちゃんも寒き影にて影おくり

雪吊りの線も劣らず年男

青ざめる鴛鴦に声かけられず

■一九七七年生まれ。埼玉県出身、在住。

飛天

渡辺竜樹

蓮の花風を披きて香りけり

佐佐木家に歌の太綱夏はじめ

一つ葉や削り削りて一句生す

水分の神深吉野もおどろく夜寒かな

塔の空澄んで飛天のわれらかな

鵜の籠に鵜の乗つてをり今朝の秋

倒木は澄みたる水を枕とし

貫禄の海鼠ずたずた酔で食はん

霏々と雪リフトくるりと帰りけり

熱爛や淡き交はり破らねど

冬晴の道あきらかや君歩む

星凍つる万卷の書を胸の中

■一九七六年生まれ。愛知県出身、在住。古志名古屋支部長。二〇一〇年。

入会案内

- 「古志」の年会費は一万二〇〇〇円です。
- 二十五歳未満（その年の一月一日現在）の場合、年会費は三〇〇〇円です。
- 会費の納入は郵便振替で振り込んでください。
- 振込み人欄に、氏名・併号（ふりがな）、生年・月、男女、郵便番号、住所、電話番号を明記ください。
- 郵便振替口座の番号は、次の通りです。
古志社 0010007512480
- 古志青年部に参加できるのは五十歳未満の古志会員です。
- 古志青年部ブログのURLは、
http://blog.livedoor.jp/koshi_seinambu/ だよ。

文章

講評

古志青年部年間自選作品を読む

大谷弘至

古志青年部は長谷川權前主宰のもと二〇〇五年（平成十七年）に発足した。私もまたその一員としておおくを学んだため思い入れは深い。

当初は三十歳以下という年齢制限もあつて、句会を行つてもあつまる部員は五、六名ほど。しかしいつの句会も真剣な修行の場であつた。前主宰の選や指導はほかの句会に増して厳しかった。「間」とりかたやことばの練りかたといった推敲上の問題から、俳句に向き合うさいの心構えや俳壇の未来といったことにまで話はおよんだ。しんと張りつめた句座に打ち寄せる江の島の波の音がいまも耳の奥に残っている。

古志青年部はいま大きな転換期にある。ひとつは部員たちが「古志」の運営の中核を担うように

なったこと。いまの「古志」はかれらによつて支えられているといつていい。もうひとつはこゝに、二年で部長が増加していることにある。かれらの新しい力が青年部にこれまで以上の活気をもたらしている。

まずはその新たな顔ぶれを紹介したい。

海風やみかんの国の田植歌

市川きつね

厨まで転がしてゆく西瓜かな

鯛焼を割つて小豆をかがやかす

昨夏、「古志」編集長に就任。青年部部长も兼任。俳壇でも注目されはじめている。〈海風や〉のような俯瞰的な句もあれば、〈厨まで〉〈鯛焼を〉にみられる生活実感の句もある。最近では故郷の山村に依拠した句もみられるようになった。若手にはめずらしく根つこのある作品は、いずれも大らかで生きいきとしている。

浴衣には納まりきらぬやんちやかな

泉 経武

冬の虫むしのちからをぬぎとられ

若鮎や巖に宿る山の神

息子の小学生俳人裕隆君をともなつて青年部にやつてきた。タイ文化の研究者である。(浴衣には)は息子を詠んだ句であるが、いきいきとしていてかつ慈しみ深い。こういった一連の作品によつて句会でも連衆を楽しませている。二句目のように息子に触発されて童心にかえつたような発想の句もある。息子との研鑽の賜物であろう。いつぼうで〈若鮎や〉のような格調高い自然詠もある。今後の展開がたのしみな作家である。

引鴨に遅れ飛行機国を出る

泉 裕隆

起こされて起きてまた寝て朝寝かな

下り坂平気で走りくる鶉

大人顔負けの表現力と子どもらしい純粹な世界観があいまつた作品でいつも連衆をあつといわせている。季語や漢字に誰よりも詳しく、席題では渋い季語をお題に出しては上級者たちを唸らせる。(引鴨に)のユーモア、(起こされて)の生活実感、(下り坂)の鶉への驚きなど、いずれも豊かな

発想に満ちている。

帯締めて金剛力や暑に抗す

川又裕一

橙も一所懸命餅の上

しろじろと犬は尿して寒の入り

青年部句会には欠席投句で参加。着実に力をつけてきた。〈橙も〉は昨年「古志」五月号の巻頭句。ほかに〈つとおはす気吹戸主か隙間風〉もあり、古格を踏まえた諧謔が持ち味のひとつ。いつそうの飛躍が望まれる。

卒業の子に珈琲を淹れてやり

竹下米花

たつぷりと珈琲淹れて梅雨籠

ソーダ水並べていざ商談の卓

丹後在住のため欠席投句で参加している。「米花（こめはな）」というが男性だそうだ。珈琲を詠むことにこだわりをもっているという。〈卒業の〉には、子どもへの思いやりとともに、そのよさ

が出てゐる。平明な句柄を活かしつつ、ただごとを脱したい。

縁側の日だまりにゐて春を待つ

竹中 彩

春風とともに届きし便りかな

熱帯夜ふとん蹴飛ばし枕投げ

おだやかで素直な作風は一、二句目にみてとれよう。いつぼうで〈熱帯夜〉の句や〈牡丹鍋ほほばる我は猪のやう〉のようなおかしみのある句もある。ときにただごとで流れてしまふきらいもあるが、いずれ克服していくだろう。福岡支部期待の新鋭。

菜の花や分厚き少女漫画読む

森 篤史

一杯の酒を分け合ふ花見かな

悩む日の長風呂柚子を道連れに

〈悩む日の〉は昨年「古志」一月号の巻頭句。若者のみに許されるまばゆい憂愁がある。学生生活を身の丈で詠んだ句がおおいが、いずれも伸びやかできらりと光るものがある。これからい

なる成長をみせていくか楽しみな作家である。

つづいて昨年から今年にかけて入会したばかりの作家たちを紹介しよう。

途切れたる会話の間にも星涼し

石塚直子

夏痩せの膝を抱えて眠りをり

筑波大学の大学院で国語学を研究中。俳句甲子園などを経て個人で活動していたが、一念発起して「古志」に入会。校正を担当している。青春性あふれる作風だが、ここからどう深まっていくか期待したい。

青梅や窓開けはなち朝稽古

高角美津子

秋の夜の小さき匙ですくふ菓子

平明で健やかな句柄が魅力。入会間もないが、すでに一句をまとめる力はあるていど備わっている。たとえば一句目、「青梅」がじつに印象的。これに満足せずいつそう俳句を深めていってほしい。

数少ない関西の若手だけに期待は大きい。

南禅寺五右衛門も見し余花ならん

辻奈央子

木洩日の涼しさの下信号待つ

古志青年部副部長に就任。部員たちに慕われている。茶道もたしなんでおり、古典的なものを志向する作家のようだ。〈南禅寺〉の句にその一端があらわれている。「古志」のさまざまな句会に積極的に参加しており、今後が楽しみである。

お隣と文句言ひ合ふ猫じやらし

山本純人

雑炊やいいかげんにも恋をして

今年入会したばかりの作家。これから投句や句会参加をとおして力をつけていくことだろう。精力的な活動を期待したい。

最後に在籍の長い作家たちを紹介する。作品を読んでいたければそれぞれの良さはわかって

らえるであろう。

初旅の目に映るものすべて花

イーブン美奈子

夏空を引き寄せてゆくロープウェイ

残像を置いてゆきたる蜥蜴かな

清新でのびやかな着想力がある。タイ在住だが、海外詠とも国内詠ともとれる普遍的な作品が多い。〈初旅の〉は言祝ぎの句。二句目、空を引き寄せるといふ把握がいい。

富士山の裾のびのびと落の臺

大塚哲也

大川を諸国の落葉流れゆく

寒鱒へ深く大きく包丁す

青年部初代部長。おおらかな句が持ち味。一、二句目、大きな景のなかで「落の臺」「落葉」という微細なものの存在が際立っている。三句目、「寒鱒」の大きさがつたわる。

はばたきて大きなことよ揚羽蝶

岡崎陽市

草原に日のあるかぎり飛蝗とぶ

つららよりひかりの玉の一雫

〈はばたきて〉は昨年「古志」九月号巻頭句。一句にたつぷりとした氣息がある。〈つららより〉はまばゆい静けさを湛えている。宇宙的な静けさといつてもいい。それはこの作者の俳句の一貫した魅力である。

鮫鱗はどん底を知る面構へ

関根千方

這ひ這ひに皆ついでゆく恵方かな

白玉に映るものみな艶やかに

「古志」ホームページを担当。観念的な傾向をもつ作者であつたが、一句に手ざわりを与える力が備わつてきた。〈這ひ這ひに〉は息子・兜太君との生活を詠んだ一連の作のうちの一つ。ほほえましい。

野良犬の乳房揺れをり山桜

高平玲子

静かなる象の足音すみれ草

かりがねや夜も休まぬ波の音

しつかりと物を描く力がある作家。二句目、動物園での吟だろう。〈母象の乳あふるるや望の月〉もある。取り合わせにも長け、詠み口の幅が広い。

一枚の紅葉となりて舟下り

丹野麻衣子

西行の花を心に草の餅

花あまた落として椿軽からん

今年より同人会副会長に就任。青年部から唯一の「古志」自選同人でもある。〈花あまた〉は角川『俳句年鑑』ほかさまさまなところで取りあげられた一句。

赤とんぼ庇を蹴つて空の中

藤原智子

芋の子の声ころころと笑ひ合ひ

頂いてあつといふ間に熟柿かな

昨年は三十句競詠賞受賞したほか、校正部長に就任。飴山賞にも毎年のように入賞しており、もつとも勢いのある若手のひとり。出産・子育てを経て作品に深みが増しつつある。

校舎よりエーデルワイス夏に入る

前田茉莉子

師の扇ぐ扇子の風を貰ひけり

牡丹鍋白内障を忘れさす

九歳で俳句を始め、十九歳で古志に入会。早熟の俳句少女のよきおもかげをのこしつつ、へ師の扇ぐの諧謔や〈牡丹鍋〉の哀歎など、年齢とともに作風の幅を広げている。

まだ青き粒も混じれり今年米

山内あかり

冬の日やきらきらこぼれ粉薬

花びらの流れてきたりしじみ貝

青年部員中「古志」在籍歴がもつとも長い実力派。「青き粒」「粉葉」「しじみ貝」それぞれ物の印象が手ざわりをともなつてはつきりと描かれている。育児のため句会を離れているが復帰が望まれる。

水分の神もおどろく夜寒かな

渡辺竜樹

鶉の籠に鶉の乗つてをり今朝の秋

貫禄の海鼠ずたずた酢で食はん

一昨年、飴山賞を受賞。情念的な面も持ちあわせる作家だが、やはり魅力はここに挙げたような古格を踏まえた句にある。かつての作でいえば〈このあたり美濃蕉門や一位の実〉〈初空やまたも雄々しく比叡山〉など。

若い世代の結社離れがすむなか、志をもつ若い仲間たちと研鑽できる環境は何ものにも代えがたい。とはいえ、いまはまだ過程にすぎない。「俳句の未来がここにある」と胸を張っていえる日まで、いつそう精進していきたい。

エッセイ

俳句という石垣

関根千方

飯田龍太はある俳話の中で、俳句を野面（のづら）積みの石垣にたとえている。

《一見無造作に見えて驚くべき合理性とその耐久力は、石の見える部分より見えない部分に何倍かの力が隠されているためであるという。しかも、あの石垣は、何百何千という無名の石工の、永い伝統に

培われた技術が生み出したもの。そこには、ホンモノの姿を、まざまざと見せてくれる真の伝統の美しさがある》（『飯田龍太全集第七巻』）。

野面積み石垣は、現代のコンクリートとスチールとガラスで構成された近代建築にあるような気密性

はない。石と石は微妙な隙間を空けつつ、互いに組み合っている。だから、いかに耐久性があるとはいえ、長い年月をかけて積み上げていけば、当然崩れることもあるだろう。しかし、石工はそれまで培われてきた技術に則って、すぐにそこを修繕、補強する。

たとえ、このたびの大地震のように一気に百年、千年という時間が巻き戻されたとしても、また無数の新たな石工たちによって石垣は再生されるだろう。

龍太が「永い伝統に培われた技術」と呼んでいる

技術とは、近代建築にあるような設計の技術とはあきらかに異なっている。石工の技術は、野面という過酷な環境下において長い年月の絶え間ない変化にさらされながら、それでも一定の秩序を維持するよ
うな石の積み方である。

たしかに、合理的に積み上げる方が、早く大きく積みあがるかもしれない。しかし、野面においてはそうはいかない。高いところに積むのと、底辺に積むのでは、技術も変わってくる。また、積みあげる場所や環境によっても積み方は変わってくる。

つまり、龍太が言う「伝統に培われた技術」とは、画一なものではない。むしろ、どんな状況においても、一定の秩序を維持し続けることのできる、変化に富んだ技術というべきであろう。

石工はその技術を過去の石工たちから引き継ぎ、またそれを未来の石工へとつないでいく。つまり、

技術は時間的なつながりをもった石工の連なりの中に存在する。

この「何百何千という無名の石工」である、無数の俳人たちは、結社に属す、属さないに関わらず、俳句を日々生産し続けている。おそらく、その時間的なつながりを自覚していようといまいと、ただ積み上げ続けている。俳人は、その実践的な持続のなかにしかありえない。

ところで、最近、この石垣の持続性が、生命の持続性と共通点があるということを知った。

分子生物学者である福岡伸一曰く、生命体は分子レベルにおいて、常に新しいものに入れ替わっている。細胞のタンパク質はアミノ酸という分子が結合して構成されていた高分子であるが、成長過程のときだけでなく、成体となったあとでも、分子レベル

で常に更新されているというのだ。

髪や爪を例に見れば分かりやすいが、身体そのものが分子レベルの代謝によって保たれているということである。福岡はその仕組みを説明するのに「砂の城」のメタファーを使っている。その「砂の城」には、石工の代わりに精霊が登場するだけで、龍太という石垣とよく似ている。

《砂の城がその形を保っていることには理由がある。眼には見えない小さな海の精霊たちが、たゆまずそして休むことなく、削れた壁に新しい砂を積み、空いた穴を埋め、崩れた場所を直しているのである。それだけでない。海の精霊たちは、むしろ波や風の先回りをして、壊れそうな場所をあえて壊し、修復と補強を率先して行っている。それゆえに、砂の城は同じ形を保つたままそこにある。おそらく何日かあともなお城はここに存在していることだろう》

(福岡伸一『生物と無生物のあいだ』)。

ひぎを擦りむいても、骨を折つても、ちゃんと治せば復元される。そのような自己修復力が分子レベルにおいて備わっているということである。続けて、福岡はこういう。

《しかし、重要なことがある。今、この内部には、数日前、同じ城を形作っていた砂粒はたつた一つとして留まっていないという事実である》。

この話だけでも十分面白いのだが、石垣と石工のように俳句と俳人の関係に置き換えて想像すると、龍太のいいかかったことがよりはつきりしてくるように入る。それは、俳句は一つの生きもののように存在しているということである。さらに、福岡は興味深い言葉を記している。

《秩序は守られるために絶え間なく壊されなければならぬ》。

生命の持続に必要なのは、修繕や補強だけではない。むしろ、自ら壊れつつ維持できるような、柔軟性や代謝力である。

生命とは「絶え間なく壊される秩序」である。これを、福岡はある生化学者の言葉を借りて「動的平衡」と呼ぶが、おそらく俳人であればここで芭蕉の不易流行という言葉を思い起こすのではないだろうか。

「石垣は見えるところよりも見えないところに力が隠されている」と龍太はいった。本当の力は、見えないところに蓄えられている。そのような隠れた力を、自らが壊しつつ掘り出してきて、未来の力に転じていく。

俳句に、もし「ホンモノの姿」があるとするなら、それはおそらくこのような生命の姿に他ならない。

*このエッセイは二〇一二年『古志青年部年間集第一号』に掲載したものを一部書き改めています。

タイの季語

イーブン美奈子

洪水である。

日本でも大きく報道され、多くの人にご心配頂いた。古志の方々にもお見舞いのメールを頂き、感謝の気持ちに堪えない。十一月半ばを過ぎた今、バンコク都心は、もう安心という雰囲気だ。しかし、十月頃はアユタヤー県がひと月以上もメートル単位の水に浸かり、その後もアユタヤーを少々下ったパトゥムターニー県、ノンタブリー県に大量の水が溜められていることを思うと、複雑な心境だ。都心を守るために、上流を犠牲にしたわけだ。水門の開閉、吸水機を利用した排水作業などにより、河川と運河の水量は日々調整されており、タイの洪水は、もは

やただの自然災害とはいえない。

かつては、バンコクもよく冠水した。少々の出水は、雨季の終わりの風物詩でもあった。タイには、雨季、雨季、涼季（または寒季）の三季があり、雨季は六月半ばから十月半ば頃となる（注）。私がバンコクに移住した十数年前も、既にかなり都市化が進んでいたとはいえ、十月は、しばしば出水に遭った。当時は高架線路を走る電車もなく、洪水するとバスも止まってしまうので、膝ほどの高さの水中を会社から歩いて帰宅したこともある。もちろん、スコールの水なので、比較的澄んだきれいな水だった

出水は、言うまでもなく、季語である。すなわち、

夏の梅雨出水に、台風の頃の秋出水。そして、タイの人々にとつても、出水は「季語」である。タイに住んでいる私たちは、出水があると「ああ、雨季が明けるのだな」と感じる。私のような在留外国人もそう感じながら暮らしているし、ましてタイ人は自明のこと。季節感がある、という意味で、出水はタイ人にとつても立派な「季語」だと思う。

話は変わるが、タイには有名な「ご当地ジョーク」がある。タイ語学校の先生などが在タイ初心者に言うことなのだが、「タイには三つの季節があります。それは『暑い』『少し暑い』『大変暑い』です（笑）」というもの。実際は前述の三季だが、このジョークは、外国人による熱帯の認識を表していて面白い。つまり、外の人々は、タイを常夏だと思っていると

いうことだ。

だが、タイにも意外としつかりした季節感がある。例えば、金雨花（ゴールデンシャワー）が咲くのは、暑季。雨季になると、スコールに雷、稲妻。マンゴスチンやライチーなど瑞々しい果物も多種出回る。出水があつて雨季が終わると、風が急に軽くなる感じがする。湿り気がざらりと消えるのだ。乾燥するので、風邪もひきやすくなる。出安居に始まる涼季は、ロイクラトンという美しい灯籠流しの行事もあり、肌寒さに目覚める朝、毛布の必要な夜もある。——と訳知り顔に書いたが、実は、これらの「タイの季語」は、ほとんどを句会で教えてもらった。タイ国日本人会に一九六二年発足の「メナム句会」という同好会があり、タイの季語を多く集めている。会員は皆日本人だが、在タイ数十年の方もいらして、知識の宝庫だ。三季、というのは、タイに一年も住

めば誰でも分かるのだが、とはいえ、更衣なしに年
中過ごせる土地のこと。よく気を付けなければ見逃
してしまふ風物も多い。明らかに季節のある花なら
ともかく、ブーゲンビリアなど年中咲いていて、涼

季に最も色鮮やかな美しさを見せることなど、句会
の先輩に教わるまで知らなかった。果物の朱欒も年
中出回るが、暑季の四月、水掛祭（ソクララン）
の頃が一番瑞々しく、美味しい。そのため、日本で
は冬の季語である朱欒を四月に詠む、というちよつ
とややこしい事態になる。海外詠ならではの葛藤だ。

日本の四季に比べれば、三季の移り変わりは、ほ
んのささやかな変化なのかも知れない。でも、その
小さな季節を感じるのと、感じないのとは、生活
の楽しみがずいぶん違う。マンゴー雨という、マン
ゴーの実る暑季の前にはばらばら散らつく雨があっ
て、タイの田舎の人に伺って見たら、「この雨がな

いとマンゴーが太らないのよ。逆に降り過ぎると果
実の肌黒点ができて良くないの」と教えてくれた。
タイの人々も俳句こそ詠まないけれど、心は俳人で
ある。

十月の、出水。四月の蟬。日本とちよつと違つた
り、全く違つたり、あるいは同じだつたりするタイ
の季節を感じつつ、ゆるやかに、句を詠んでけれ
ばと思う。

（注）気候学的には、雨季と乾季に区分されるが、生活上、実
際感じられるのは三季である。暑季は二月半ば、雨季は六
月半ば、涼季は十月半ばから。タイ全土でも、地域によつて
気候はかなり異なる。

魔力

前田茉莉子

二十歳の誕生日。母から買ってもらったこれは、不思議な力が籠っている。どういうわけか持つているだけで筆力があがる、俳句の力がグッと上がるような錯覚が起こった。

猫柄の万年筆。

今まで書くものといったら、シャーペンシルとボールペンの生活を送ってきた私に乗って万年筆というものはなんだか遠い存在だった。憧れだった。

母と行った実家近くの文具店。プリンター用紙とノートを買いに来ただけだった。買い物を終えて、母の買い物が終わるのを文具店をぶらぶらしながら待つていた。その時、ガラスケース棚に並んだ万年

筆たち。蒔絵のものだったり、ただ漆黒のものだったり、キャラクターものだったり。さまざまなのが並んでいた。私は、それをとり憑かれたように入っていた。値段は五千円〜十万円まで。大学生の私には手がだせそうにない。でも、見るだけで満足だった。いつかは持ちたい。でも、なんだかまだ持つには早いような気さえ起きる。どういうわけか、特別に選ばれた人のみが許される特別な武器みたいな気がするのだ。

「万年筆……これ持ったらなんか筆力アップしようだな……。」

と、ふと本音が飛び出した。食い入るように見てい

たら、携帯電話が鳴った。母からだつた。

「どこいるの？帰るよ。」

気付いたら母はとづくに買い物を追えて、文具店の入り口で待つていた。

「何したの？」

「店内をぶらぶらしてた。」

「そう。」

もう少し見てみたかつた。後ろ髪引かれる思いで文具店を後にした。

夜、家族が誕生日パーティーを開いてくれた。そして、プレゼント贈呈の時、母が小さな長方形の箱をくれた。ピンクの包装紙に包まれていた。そつと包装紙をひらく。中か羅出てきたのは猫の模様の万年筆だつた。そつと手に取る。すぐく重く感じた。

「どう？ 茉莉子？」

「すぐく嬉しい！」

私は小躍りした。夢に見た万年筆なのだ。

「良かった。あなたももう二十歳。俳句もがんばっているし、そろそろ持つていいと思つてね。」

「ありがとう！ やつた！」

嬉しくて今にも飛び跳ねたい気持ちになつたのをぐつと堪えた。

「これからも俳句と勉強精進しなさい。」

「はい！」

その日の夜、早速使つてみることにした。気分を上げるために引き出しの奥から引きずり出した原稿用紙。原稿用紙に万年筆を持つて構える。気分は小説家か、もしくは名だたる俳人か。ふつと深呼吸してさつそく書くことにした。何を書くか。今月作つた俳句を書いてみようかと決めていた。

『ガリッ。』

と、鈍い音とを立てて原稿用紙が破けた。

「あれ？何で？もう一度。」

再び破れる。

「えっ。なんで……。」

こう、さらさらつと書けることをイメージしていた私にとつて衝撃的だった。同時に、なんか悔しさと悲しさが沸き起こってきた。

「もう一度……。」

今度はちよつと力を抜いてそして……。

一時間後、私はいまだに万年筆相手に孤軍奮闘していた。なかなかコツがいるようだ。力加減と角度といえずごく難しい。原稿用紙は、ところどころが破れたり、インクが漏れたり、いびつな『あ』という文字が並んでいるだけだった。もはや意地だった。クーラーがきいている部屋なのに、汗だくだった。そんな私の様子を心配した母が、
「慌てなくてもいいから、ゆつくり、使いこなして

いけるようになればいいんだよ。」

と声をかけてくれた。その一言で、ふつと体の力が抜けた。そうだ慌てる必要はない。この万年筆は逃げたり隠れたくないんだ。大げさな言い方かもしれないが、一生の相棒なんだ。

あれから数年。その万年筆は静かに私のペンケースに入っている。さすがに書き慣れた。でも、多様はしない。そう決めている。大事な時だけ。大事な俳句会の時、小説を投稿するときの封筒の宛名を書くときなど、ここという時に現れて活躍してくれる。もうすでに新しいインク三本目だ。活躍してくれた後は、私はそつと拭いて身なりをきれいにしてあげる。相棒へのお礼も兼ねて。

しかも、この万年筆、私に不思議な魔力を与えてくれる。俳句に行き詰った時、ぎゅつと握ると不思議と気持ちが落ち着くのだ。エネルギーを分け与え

てくれるそんな気がする。

万年筆。これからも、ずっとともに俳句人生を歩んでいく。

報告

青年部合宿会報告（十月一日、二日）

市川きつね

合宿の舞台は奈良県東吉野村。日本最後のオオカミが捕獲された山深い土地であり、原石鼎庵や、著名俳人の句碑が多くある、俳人にゆかりの深い土地でもある。

参加者は大谷主宰をふくめて八人。関東からは丹野さん、辻さん、きつね、愛知から渡辺さん、大阪から高角さん、福岡から竹中さん、熊本から前田さんが参加。

毎月の青年部句会は欠席投句も交えて行われる。メールのやりとりはするが、直接会って句会をするのは初めてだ。私は「古志青年部」と書いたプラカー

ドを持ってくるべきだったと思った。

なんとか全員集合！ バスで初日の吟行場所、長谷寺へ。

長谷寺は四季の花々、特に牡丹が有名である。西国三十三所巡礼の札所のひとつであり、多くの古典文学の舞台となってきた。仁王門から、低い木の階段である登廊がずーっと続いているのが印象的。礼堂からは遠くの山々まで見渡せた。

長谷寺からバスで一時間ほど走ると、本日の宿「天好園」に到着。宿の方々がとびつきりの笑顔で迎え

てくださいる。まずお庭の広さに驚いた。一万坪もある

そうだ。紅葉がうつくしい木々と、これまた大きな池がある。池の鯉は人が近づくと逃げていく。携帯電話の電波がたたない。澄んだ空気がうまい。空

が広い！こんなに大きな空を見るのは久しぶりだ。

すぐに、宿の隣の「たかすみの里」に向う。「たかすみの里」は俳句のギャラリーを備えている温泉施設で、私たちが訪れたときは「現代女性俳句展」をしていた。

みんなで露天風呂に輪になって、普段自分が参加している句会の様子や、俳句をはじめたきっかけなどを話した。裸の付き合いのおかげですつかりうち解けた。

でも、あまりおしゃべりはしてられない。句会まで時間がないのだ。宿に戻ると、それぞれ俳句を

作りはじめた。

秋深き山の味する薄茶かな

奈央子

水分の神もおどろく夜寒かな

竜樹

待ちに待った夕食は、この土地の山と川の幸がすべて集まっているのではと思うくらいのご馳走だった。鮎の塩焼き、鯉の洗い、秋野菜の天ぷら、松茸の土瓶蒸し……、そして牡丹鍋！ 猪はもつと獣くさいと思っていたけれど全然そんなことない！そしてとつてもやわらかい。私たちは一品一品料理が出てくる度にきやあきやあ歓声を上げた。宿の方から、両手を広げたくらいのサイズの松茸を見せていただいた。宿の近くに住んでいる俳人の方からは、どぶろくのさしいれがあった。

料理を楽しみつつも、みんな句を作ることは忘れ

ていない顔つきだ。夕食後は、誰もが真剣に句帳に向っていた。

猪食うてまつくらの庭へ出ん 弘至

松茸の育ちし山に句会せん 茉莉子

牡丹鍋ほほばりて我猪のやう 彩

いただきし新酒すなはち濁酒 麻衣子

ひとつの部屋に集合して女子会を開催。部屋の冷蔵庫の缶ビールを一本ずつ飲んだ。おしゃべりに盛り上がり、女子会は深夜に及んだ。同世代の俳人の友人を得てとてもうれしい。

主宰は句に直しを入れた場合、その理由をひとつひとつ丁寧に説明してくださった。特選・入選句以外の句にもアドバイスをくださった。青年部の句会では、俳句の形になりきれしていない句も多く見られるという。作る段階から助詞の一字まで注意を払いたい。

いつまでも秋のともしの消えぬ部屋
きつね

句会の後、全員で宿の記帳に名前を書かせていただいた。俳句が書かれているノートもあつた。主宰は筆で大きく一句を書きつけた。

二日目。女子会がたたつて眠い。しかし寝ているのはもつたいないので散歩に出かける。宿の近くの川辺では、鹿や猪の足跡を見つけた。すごい自然の中にいるのだと感じた。道々に水引の花をはじめとして様々な秋の草花が咲いている。お庭では、はじ

めてナンバンギセルを見た。花は知っているが、山法師の実を見るのはじめてだった。ゲームに出てくるアイテムの実みたい。これらの珍しい草花は、天好園の方々が丹精を込めて育てているもの。朝食の席では、ポストカードを一枚ずついただいた。写っているのはお庭やこの里で撮られた植物の写真だそう。

出発のときには、天好園のみなさんで見送ってくださった。短い間だったがとても貴重な体験をさせていただいた。またいつかみんなで来たいと思う。

はじめての茶粥がうれし秋の朝 美津子

二日目の吟行場所は室生寺。またの名を女人高野。国宝の金堂、弥勒堂、五重塔を過ぎると、奥の院に続く高い石段がある。その高さといったら！ 天

にも届かんばかりである。登ろうかどうか迷ったが、年配の方も多く登っているので、決心した。長谷寺と違って、石段の一段一段が高い。なんとか登りきって、奥の院から下界を見おろすと、他のみんなも続々と登ってくる。

塔の空澄みて飛天の我らかな 竜樹

句会前、主宰と丹野さんからの草餅のさしいれがありがたかった。女人高野の石段により、体力の限界が近づいていた。その一方で、これで合宿最後の句座と思うと、ちよつとせつない。

身に入むや女人高野を登りつめ 麻衣子
どぶろくの文字太々と店に吊る 美津子

青年部句会は、主宰出席にして少人数の句会という実に贅沢な句会である。今後ともこの贅沢な句会からあますことなく俳句の養分を吸収していきたい。

私たちは帰りの電車の中でさつそく、来年の合宿会場をどこにしようかと話し合ったのだった。

二〇一一年 古志青年部年間活動記録

- 一月二十一日(金) 句会
- 二月二十七日(日) 吟行句会
- 三月二十五日(金) 句会
- 四月十五日(金) 句会
- 五月二十九日(日) 吟行句会
- 六月二十九日(水) 句会
- 七月三十一日(日) 吟行句会
- 八月三十日(火) 句会
- 九月十七日(土) ～十九日(月)
鍛錬句会と合同
- 十月一日、二日(土、日) 合宿句会
- 十一月五日(土) 吟行句会
- 十二月一日(木) 句会

編集	市川きつね
初版デザイン	千種創一（外大短歌会、塔）
PDF版デザイン	関根千方

古志青年部年間作品集 第1号

2012年3月31日 初版発行
2015年11月1日 PDF版発行

発行者 古志青年部
発行所 古志社 (<http://www.koshisha.com/>)
印刷所 しまや出版

©2012 KOSHI SEINENBU